

審査論文要旨 (日本文)

論文提出者氏名： 佐藤 宏樹

審査論文

題名： Interstitial Lung Disease associated with Cetuximab in Patients with Head and Neck Carcinoma: A single-institution experience in Japan

(頭頸部扁平上皮癌患者に対するセツキシマブ投与関連間質性肺炎の検討)

著者： Hiroki Sato, Kiyooki Tsukahara, Isaku Okamoto, Soichiro Takase, Kunihiro Tokashiki, Yuri Ueda, Kazuhiro Hattori, Ayumi Agata, Akira Shimizu

掲載誌： International Surgery(in press, 2018)

背景と目的：セツキシマブは抗ヒト上皮細胞増殖因子受容体(EGFR)抗体で、頭頸部扁平上皮癌に標準的に使用される薬剤の一つである。間質性肺炎はセツキシマブのまれな有害事象である。セツキシマブの薬剤性間質性肺炎は死亡リスクが高く、セツキシマブに関連する最も予後の悪い有害事象の一つである。しかしながら、頭頸部癌患者におけるセツキシマブによる薬剤性間質性肺炎の発症のリスク因子は不明である。EGFR チロシンキナーゼ阻害薬(TKI)はセツキシマブと同様に分子標的治療薬として分類されている。EGFR-TKIによる薬剤性間質性肺炎の発症のリスクは喫煙者、55歳以上の高齢者、肺疾患の既往、および Performance status (PS)の低下であることが報告されている。当研究の目的は頭頸部扁平上皮癌患者におけるセツキシマブによる薬剤性間質性肺炎のリスクを EGFR-TKI による薬剤性間質性肺炎のリスク因子を用いて後方視的に分析することである。

対象と方法：対象患者は2013年3月1日から2015年4月30日までの間に、東京医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科でセツキシマブを投与された44例の頭頸部扁平上皮癌患者であった。患者の選択基準は局所療法として放射線治療にセツキシマブを併用し投与した患者、再発転移頭頸部扁平上皮癌に対して、シスプラチンもしくはカルボプラチンと5FUとセツキシマブの併用療法を行った患者、パクリタキセル、セツキシマブ併用療法を行った患者であった。44例のうち6例が間質性肺炎を発症し、これらの6例の患者について、年齢、性別、肺疾患の既往の有無、喫煙歴、PSについて評価した。

結果：間質性肺炎を発症した6例のうち、2人が間質性肺疾患により死亡した。間質性肺炎を発症した全ての患者は55歳以上であり、喫煙歴を有していた。間質性肺炎を発症した3人の患者には、肺障害の既往があった。PSは4例で0であり、1例で2であった。

結語：頭頸部扁平上皮癌患者に対するセツキシマブ投与において55歳以上の年齢、喫煙歴および肺疾患の既往が間質性肺疾患の危険因子となる可能性が示唆された。